



TITLE:

東アジア儒教研究の価値と意義: 宋明理学の概念と議題の発展を例として

AUTHOR(S):

江, 俊億

CITATION:

江, 俊億. 東アジア儒教研究の価値と意義: 宋明理学の概念と議題の発展を例として. 2015年度京都大学南京大学社会学人類学若手ワークショップ 東アジア若手人文社会科学研究者ワークショップ報告論文集 2016: 88-89

ISSUE DATE:

2016-06-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/215806>

RIGHT:

東アジア儒教研究の価値と意義
宋明理学の概念と議題の発展を例として
江 俊億 (CHIANG Chun-yi) *

発表者は儒家思想に共感しており、自分の学問の方向性について、ただ儒家思想中の宋明理学から考えるだけでなく、更に学術自体の発展ということを考えつつ、「東アジアの儒学」ということにまで視野を広げたいと考える。そして、宋明理学が本来有する概念や思索の論題の、朝鮮や日本の東アジアの儒者の思考中の影響関係やその位置付けについて探求したいと考える¹。

この研究方向について、発表者はその価値と意義とは、同一の概念や思索の論題の多元化を肯定する、ということにあるものと考えている。周知のように、宋明理学の中でも「朱子学」は近世以降東アジアの各国における思想的基盤となった。ただ、中国、日本、朝鮮などの各国は空間的に近隣の位置にある、というだけでなく、時代と社会について言えば、朝鮮・日本の風土や政治や宗教の状況はそれぞれ同じではないため、朝鮮時代（1392-1910）と江戸時代（1603-1867）の儒者たちは相対的に開放的な態度を保持しつつ、宋明理学宋（960-1276）、元（1277-1367）、明（1368-1643）以来の膨大な成果に対して批判的に改めて取捨したり、議論したり、ひいては更に反応して、独自の思考と独特の風格とを表明するに至ったのである。

具体的には以下のような例がある。朝鮮儒学においては、朱子学が官学の地位にあったため、陽明学は差別的な弾圧と排斥に遭い（ただわずかに江華学派としてなお伝授された）、朝鮮儒者は基本的に皆朱子学を自らの視点とし、「無極太極」「四端七情」「人心道心」「人性と物性の同異」それに「心」や「明德」は「主理」であるのか「主氣」であるのか、などの議題について、幾度も論争を展開し、朱子学の理論をより緻密なものにした。このことと、明朝で陽明学が天下に行われ、陽明後学によって（後天的な机上の学問ではなく、先天的な良心の発揮を重視する）「致良知」の学風が流行したこととは鮮明な対比を為すものである。日本の江戸時代について言えば、徳川幕府は朱子学を官学としたとはいえ、中国や朝鮮のように科挙を行って人材を登用することは全くなかったため（朱子学以外の学問を禁止する「寛政異学の禁」も実際には大きな効果はなかった）、「朱陸の争」（朱子と陸象山との論争）に関しては日本では、「最初は異なり、最後には一致した」とするような議論の限定もなく、開放的であった。そのため、各地の儒者の伝授においても、朱子学の特色のある学統が次第に出現しただけでなく、陽明学においても少なくない自発的な継承者が存在した。江戸の学者にはそのほかにも「古学」「古文辞学」や、外来の儒教仏教を排斥し日本文化の主体性を宣揚する「国学」などの学派が出現し、さながら百家争鳴の観を呈した。

これによって以下のように言うことができるものと思われる。東アジアの儒者は宋明理学が持っている概念や思索の論題に直面した際、中国の儒者の意見や評価と食い違えることができただけでなく、その地の土着の思想とも相互に影響を与えながら、一家の言を形成したので

* 台湾警察專科学学校兼任講師、国立台湾大学中国文学系博士課程。

¹ 必ず説明しておかなくてはならないのは、本文で挙げている例は個人の所感と紙幅の制限によって、「東亜儒学」中の「宋明理学」概念や議論テーマの発展状況だけを主とするもので、「東亜儒学」中の「経学」方面（五経を主とする、文献・訓詁研究）については言及できないということである。この点に関しては、読者のご寛恕を願いたい。

ある²。よって、発表者は東アジアの儒教研究の価値と意義とは、古今の現実の国や地域、政治的立場に決められるものではなく、学術そのものに回帰するものである、と考える。概念と議題の多くの方面から東アジアの儒者の理解について検討できるし、また同時に宋明理学の研究を振り返り、深化することができるのである³。このようなことに対して私は微力ながら貢献したいと考える。皆様方にご示教お願い申し上げる次第である。

(翻訳 福谷彬)

² 具体的には以下のようなものである。陽明学が朝鮮で非難を受けたが、中国の朱子学者の羅欽順（整菴、1465-1547）の理気論、心性論は朝鮮儒学における論争の主要な参照対象となり、重要な地位にあった。現地の思想を取り入れるという点については、中江藤樹（1608-1648）は陽明学を奉ずるとはいえ、日本固有の「神道」思想に対して敬意があり、山崎闇斎（1618-1682）は朱子学と神道とを融合させ、「垂加神道」を創立するに至った。

³ 東アジアの人文研究に対して、黄俊傑は「東アジアの経験を集め、東アジアから出発して考える」、「経書のような古典や価値理念を研究の核心とする」、「文化を研究の筋道とする」の三大研究方向を提唱しており、参考になる。氏著『東亞文化交流中的儒家經典與理念—互動、轉化與融合—』（臺北、國立臺灣大學出版中心、2011年、i-viii）。この他、台湾のここ二十年の東アジア儒学研究成果は、黄俊傑の主導で、『東亞文明研究叢書』、『東亞文明研究資料叢刊』、『東亞文明研究書目叢刊』、『東亞儒學研究叢書』、『東亞儒學資料叢書』、『身體與自然叢書』（楊儒賓、陳昭瑛主編）として、等百冊余りの専門書として出版されている。有志於東アジア儒学の研究を志す者には、見て頂きたい。